

「いわゆる市場問題について」の3つの結論

さて、前掲の表式からでてくる結論を総括しよう。

第一の結論は、「市場」の概念は、社会的分業——マルクスが言っている「あらゆる商品生産《したがってまた資本主義的生産——と、私から付けくわえよう》の一般的基礎」——の概念と、まったく不可分のものである、ということである。社会的分業と商品生産とがあらわれるところに、また、あらわれるかぎりで、「市場」があらわれる。そして市場の大きさは、社会的分業の専門化の程度と、不可分にむすびついている。

「彼の生産物が一般的な、社会的に妥当な等価形態をうけとるのは、貨幣においてはほかならず、しかも、その貨幣は他人のポケットにある。貨幣をそこから引き出すためには、その商品はなによりもまず、貨幣所有者にとっての使用価値でなければならず、したがって、その商品に支出された労働は、社会的に有用な形態で支出されていなければならない。すなわち、**社会的分業の環たる実をしめさなければならない**。だが、分業は一つの自然発生的な生産有機体であって、その構造は、商品生産者たちの背後で織りあげられたのであり、また織りつづけられていくのである。その商品は、ひよっとすると、新たに生じた欲望をみたすと自称する、または、自分の腕で、ある欲望をこれから呼びおこそうと欲する、ある新しい労働様式の商品生産物であるかもしれない。**ある特殊の労働遂行は、きのうはまだ一個同一の商品生産者の多くの機能のうちの一機能であったが、ひよっとすると、こんにちはこの結びつきから分離し、自立し、そしてまた、それゆえにこそ、その部分生産物を自立的商品として市場におくるかもしれない。**」（『資本論』第一巻、八五ページ。ゴシツクは私による。）〔第三章、第二節（a）、111ページ〕

このように、資本主義社会が存在するところでは、市場の発展にたいする限界は、社会的労働の専門化の限界によって立てられる。ところで、この専門化は、その本質上、技術の発展と同じように、限りないものである。たとえば、総生産物のうちのある一小部分の生産にむけられている人間労働の生産性が高まるためには、この小部分の生産が専門化されること、すなわち、その生産が、大量生産物を取りあつかい、それゆえにまた機械、等々の使用を可能にする（そして呼びおこす）特殊な生産となることが、必要である。これが一面である。だが、他面では、資本主義社会における技術の進歩は、労働の社会化にある。ところで、この社会化は、生産過程の各種の機能の専門化を、すなわち、それらの機能が、この生産に従事している各経営のなかで他とははなれてくりかえされる、分散した個々のものから、社会化されて一つの新しい経営に集中され、かつ社会全体の欲望の充足を目あてとする機能に転化することを、必然的に要求する。……………

ここで、ひとことことわっておかななければならない。前述したすべてのことは、資本主義的国民は外国の市場なしには生存しえないという命題を、すこしも否定するものではない。資本主義的生産のもとでは、生産と消費との均衡はあいつぐ動揺によってのみ達成される。生産が大規模であればあるほど、また、生産があてにしている消費者群が広範であればあるほど、この動揺はますます強烈である。そこで、ブルジョア的生産が高度の発展段階にたったときは、それが、すでに民族国家のわく内にとどまっていることができ

ないことは、明らかである。競争は、資本家に、ますます生産を拡大し、そして生産物の大量販売のために外国市場をさがすことをよぎなくさせる。明らかなことであるが、資本主義的国民にとって外国市場が必要であるということは、市場は商品経済のもとでの社会的分業の単なる表現であり、したがってまた、それは分業と同じように限りなく成長する、というあの法則を、すこしでもやぶるものではない。それは、恐慌が価値法則をすこしでもやぶるものでないのと同じことである。市場についての嘆きの声が、はじめてロシアの文献にあらわれたのは、わが国の資本主義的生産が、その一定の部門（たとえば綿業）で完全な発展をとげ、ほとんどすべての国内市場をつかみ、そして少数の巨大企業にかたまったときのことである。……………市場の不足ということでわが国の工業の破滅を泣きわめくことは、わが国の資本家たちの見えすいた策動にほかならない。彼らは、このようにして政治に圧力をくわえ、（自分の「無力」を遠慮がちに自覚して）自分のポケットの利益を「国」の利益と同一視しているのである。そして、政府を侵略的植民政策の道におしやり、また、このような「国家的」利益をまもるためには政府を戦争にさえも駆りたてる力があるのだ。市場についての泣きごと——十分に強くなり、すでに尊大ぶることさえできるようになったブルジョアジーの、このわにの涙——を、わが国の資本主義の「無力」の証拠と思いがいするには、まさに、ナロードニキ的な空想主義とナロードニキ的なおめでたさとの底なしのふちが必要である！

第二の結論は、「人民大衆の貧困化」（市場にかんするあらゆるナロードニキ的な議論のかならずの付きもの）は、資本主義の発展をさまたげないばかりでなく、かえってその発展をあらわすものであり、資本主義の条件であり、また資本主義を強化するものである、ということである。資本主義にとっては、「自由な労働者」が必要である。そして、貧困化とは小生産者が賃金労働者に転化することである。大衆のこの貧困化は、少数の搾取者たちの富裕化をとめない、小経営の零落と衰微とは、より大きな経営の強化と発展をとともなう。この二つの過程は市場の発展を助成する。……………

第三の結論は——生産手段の生産の意義にかんするもので——表式に修正をくわえることを要求する。すでに指摘しておいたように、この表式は、資本主義の発展の総過程を叙述しようというものではけっしてなく、現物経済の商品経済による交替、また、この後者の資本主義経済による交替が、市場にどのように反映するかを、えがこうとするものにすぎない。だから、そこでは蓄積が捨象されていた。ところが、現実には資本主義社会は、蓄積しないでは存在することができない。なぜなら、競争は、没落という威嚇によって、各資本家を強制して生産を拡大させるからである。……………

生産手段のもっとも急速な増大というこの法則のすべての意義とすべての重要性は、手労働の機械労働による交替——一般に機械制工業のもとでの技術の進歩——が、石炭や鉄、これら真の「生産手段のための生産手段」を獲得するための生産の強力な発展を要求する、ということにある。……………

（注）表式とはマルクスの再生産表式を応用したもののこと

これら三つの結論につけくわえて、さらに二つの指摘をしておく必要がある。

第一に、前述のことは、マルクスがつぎの言葉でかたっているあの「資本主義的生産様式における矛盾」を、すこしも否定するものではない。「商品購買者としての労働者は市場にとって重要である。だが、彼らの商品の——労働力の——販売者としては、資本主義社会は、労働力を最低価格に制限する傾向がある」（『資本論』第二巻、三〇三ページ、注三二）〔第16章、316ページ〕。すでにさきにしめしておいたように、資本主義社会では、消費資料を生産する社会的生産のあの部分もまた、増大しないわけにはいかない。生産手段の生産の発展は、前記の矛盾をすこし先にのばすだけであって、それを絶滅するものではない。その矛盾は、資本主義的生産様式そのものの廃除とともに はじめて廃除されるのである。しかし、白明のことだが、この矛盾のうちにロシアにおける資本主義の完全な発展にたいする障害を見ることは（これはナロードニキが好んでするところであるが）、まったくばかげたことである。しかし、このことは表式によって、すでにじゅうぶん解明されている。

第二に、資本主義の発展と「市場」の発展とのあいだの関係を研究するばあい、資本主義の発展が全住民と勤労プロレタリアートとの欲望の水準の増進を不可避免的に伴うという、疑いのない真理を見のがすことはできない。この増進は一般に、都市の住民と農村、相異なる地理的諸地方、等々の住民とのあいだの、よりひんばんな接触をもたらすところの、諸生産物の交換のひんばん化によってつくり出される。またプロレタリアートが結集し、集合していることも、同じことをもたらす。それは、プロレタリアートの自覚と人格感情を高め、そしてプロレタリアートが資本主義制度の略奪的諸傾向にたいして成功的にたたかうことを可能にする。欲望の向上というこの法則は、ヨーロッパの歴史のうえで完全な力をもってあらわれた。たとえば、十八世紀末と十九世紀末とのフランスのプロレタリアートを、あるいはまた一八四〇年代のイギリス労働者と現代のそれと比較してみたまえ。この同じ法則は、ロシアでもその作用をあらわしている。すなわち、農民改革後の時代における商品経済と資本主義との急速な発展は、「農民層」の欲望水準の向上をも呼びおこした。農民は（衣服、住宅などの点で）「よりきれいな」生活をするようになった。疑いもなく進歩的なこの現象は、ほかならぬロシア資本主義のおかげであって、それ以外のなもののおかげでもないこと、——このことは、工業的地方の農民が、農業にだけたずさわっていて、ほとんど資本主義にふれることのない農民よりも、はるかに「よりきれいな」生活をしているという周知の事実（これはわがクスターリ工業や農民経済一般の研究者のすべてによって強調されている）によっても、すでに証明されている。

第一巻「いわゆる市場問題について」P96~103 1893年秋

コメント

当時ナロードニキの「理論」、資本主義はロシアに人為的に持ち込まれたのであり、外国市場を持たないロシアでは発展しない、「人民的生産」こそがロシアの発展の道であり、そういう考えが「社会」で承認されれば世の中が変わるとする「理論」に対し、資本主義の発生と発展のメカニズムを示し、ナロードニキ主義や「合法マルクス主義」との闘争における強力な武器となった。

現代の日本でも、**第二の結論**を理解できず、賃金を上げれば経済成長ができると思っている「共産黨員」が共産党の中枢にいる。非常に残念である。